かさおか

発行所
天理教笠岡大教会
かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
（0865）
電話 66−1311
FAX 66−1314

竹花秀

初代の心にかえり信仰の喜びを
深めよう　伝えよう　広げよう

一、持ち場立場で日々理作り
一、家族揃って教会参拝
一、一日一件にをいがけ

立教174年
2月号

立教174年 年頭会議

勇んで 外に向っての歩みを！

大教会長様 あいさつ

立教174年大教会年頭会議は、1月20日午後2時から大教会神殿で行われ役員、部内教会長、布教所長らが参集した。まず1月4日、本部会議所における真柱様の年頭あいさつを拝聴、引き続き、大教会長様は大教会創立120周年記念祭に向かう三年千日活動仕上げの本年、私たちの日々の通り方の心構えを話された。その後、講堂で会食がもたれた。あいさつの要旨は次の通り。

◎本年は「仕上げの年」

昨年は、大教会創立百二十周年に向かう三年千日と仕切っての二年目として、「家族揃って教会参拝」に重きをおいて成人の歩みを進めた一年でした。

お陰で、別席・ひのきしん団参、また笠岡一手一つ大会にも、本当に大勢の方が参加して、共々に「家族揃って」という姿を実現できた一年ではなかったかと思います。

笠岡一手一つ大会では、千三百人を越える方が集まり、子どもさんもおつとめ衣を着て、親子共々のおつとめの姿をご覧いただき、昨年一年間の歩みを親神様・教祖・祖霊様にご覧いただけたと思います。

いよいよ本年は、大教会創立百二十周年の年、三年千日と仕切っての仕上げの年です。

◎「広げよう」の意（こころ）

実践項目が三つありますが、三つとも、もちろん、三年間かけてつとめていることですが、一年目は、日々の理作り、一人ひとりが理作りを、二年目は、家族揃っての理作りと同時に、信仰の喜びを分かち合うということに重きをおいてつとめました。

そして今度は「一日一件にをいがけ」、一人ひとりの喜びを外に向かって広げようというのが、本年、「仕上げの年」の活動の芯です。

スローガンの最後を「広げよう」という言葉にしていますが、実は、この三つ目の言葉、最初は、「広めよう」にしようかという案もありました。

正式な言葉の意味合いではないと思いますが、私自身が感じる言葉のニュアンスが若干違うと感じ、「広げよう」にしました。

「広めよう」というと、一つの事柄を多くの人に広めることになりますが、どうも、この言葉、

上原明勇様 6代会長後継者に

去る1月29日の大教会役員・直轄教会長会議の席上、大教会長様より、長男・明勇様が笠岡大教会6代会長後継者になられる旨が発表された。明勇様は昨年10月26日付で本部青年に登用されている。

大教会本年心定め

○初席者数	２７９人（８５人）
○よふぼく数	２１７人（６２人）
○修養科修了者数	１３５人（２８人）
○教人登録者数	１１４人（　４人）

（括弧内は昨年の実績）

記念祭までに心定めを完遂するよう
つとめさせて頂きましょう

どうしても、自分が通っていなくても、ただ「親神様・教祖の思召・親心」を、もっと狭めると「教理」を人さんにお話しすれば、これはまあ「広める」ことになってきましょうか。

ところが、今回の場合、飽くまで「自分に信仰の喜びを」ということを考えれば、教理以前の問題として、自分自身の信仰の喜びを伝え広めるとなると、自分自身が「発信源」となって、自分の喜び・感謝の気持ちを伝えていくことを意味するのは、「広げよう」という表現の方が、その意味をより理解しやすくはないだろうか。

教理を取り次ぐだけなら「広めよう」でいいのでしょうが、今回の歩みは、教理が云々というよりも、教理を、先ず自分自身の中で深め、そして、それを喜びとして味わったその気持ちを一人でも多くの人に伝えていくという意味合いの方が強いことから考えて、「広める」よりも「広げる」という言葉にしたということです。

先ず、そこのところをしっかり心に置いていただきたい。

◎「広げる」ための心構え

心持ちの部分だけかも知れませんが、「一日一件にをいがけ」は、今までのにをいがけとはちょっと違っています。

そこには、自分の喜び・感謝の気持ちを伝えていくという思いを、先ず持つ。

先ず、自分の喜びをどう伝えていくか。その上で、どう教理が関係してくるかに繋がるので、もちろん教理も大切なことですが、教理そのものよりも、信仰の喜びを伝え広げていくという思いを強くする。

パンフレットを持ってにをいがけ・おたすけするのも、教えがこうだからしなくてはならないのではなくて、親神様のご守護に対する喜び・感謝の気持ちがあるからこそするということであり、一番大切なのは、心なのです。むしろ、させていただきたい、させていただくという、自分自身の信仰から発展していくところのにをいがけ・おたすけ、ということが「一日一件にをいがけ」に込められた今年一年の思いであってほしい。また、そうでなければならない、ということを申し上げたい。

本年の活動指針を発表される大教会長様

◎「一日一件にをいがけ」とは何か

「一日一件にをいがけ」ですから、当然、外に向かってつとめます。

パンフレットを持って知らない人のところに行くことも含まれますが、できる人もいればできない人もいる。できやすい人もいればできにくい人もいる。

でも、一人でも多くの人に「一日一件にをいがけ」はしてほしい。外に向かって、喜びを伝えていってほしい。

それでは、自分にできる「一日一件にをいがけ」は何か。パンフレットを持ってできないのなら、できるにをいがけは何か、外に向かって喜びを広げていく手立ては何かと考えてみましょう。

それでは、ひのきしん。喜びをひのきしんの態度に現わしたい。そう思う上から、自分の家の回りだけではなく、せめて近所の掃除のひのきしんをするというようなことも「一日一件にをいがけ」になるのではないか。

「なかなかそれもしにくい」というなら、一日一回、それこそ知り合いでも結構ですし、行き交う人とでも結構です、「おはようございます。今日もいい天気ですね。結構ですね。有難いですね。仕事、元気で頑張ってください。」という日常の会話の中で、「有難い、結構」という喜びの言葉・感謝の言葉を添えて会話をすることも、一つには、

喜びを広げることになりはしないでしょうか。

だから、自分ができる喜びを広げていくことを、外に向かって、とにかく一日一回やることが「一日一件にをいがけ」だと、先ず、心においていただきたい。

（もちろん、今日、お集まりの方々は、教会長さん・奥さん、そして布教所長さんですから、そういう立場の人が、「おはようございます。結構ですね。」だけでは、それは、なかなかそういうわけにはいきませんから、もちろん、パンフレットも持って、率先して、にをいがけ・おたすけにも歩んでいただきたい。）

◎「一日一件にをいがけ」の心構え

ただ、そのあり方は、少なくとも、常に、信仰の喜び・感謝の気持ちを持って、そして、その喜び・感謝の気持ちを伝えにいくという思いを、にをいがけ・おたすけの根本に持って、つとめたい。

「しなければならないから」ではなく、「せずにはおれない」という思い。そこまで思い切るのは難しいとしても「その思いを持たせてもらおうという思い」でも構いません。

「よし、にをいがけに出よう。何とか今日、どんな形でも一軒廻ろう。」と、パンフレットを持って、そのつもりで出て、なかなかピンポンできなくても、すれ違う人に「いい天気ですね。有難いですね。」と言えたなら、パンフレットを渡していなくても、その思いは渡したことにならないでしょうか。

会社づとめをしている一般の一よふぼくなら、会社に行ったときに、「おはようございます」とあいさつを交わすでしょう。普段なら、それに加えて、「今日も元気で頑張りましょう」ぐらいは、あいさつされると思いますが、それに加えて「今日もいい天気ですね、結構ですね、嬉しいですね。今日も一緒に頑張りましょう。」これぐらいは、信者さんでもできるのではないでしょうか。

ひのきしんも、ただそれだけではなく、例えば、「有難い、嬉しい」と独り言のように、走りながらでもしたなら、通りすがりの人が、それを耳にするかも知れません。「えらいおかしな人がおるもんやな」と怪訝（けげん）な顔をして通り過ぎる人が多いかも知れない。でも、そういう形ででも、「有難い、嬉しい、結構」という言葉、少なくてもそれらを一言聞いてもらっただけでも、それも「一日一件にをいがけ」に繋がるのではないか。

そういうこともすべて含めて、何かしら外に向かって喜びを現わしていく、出していく、それを今年一年、通り切らせていただきたい。

◎三年千日の結実は何か

それでは、そのことによって、どれだけにをいがかかるのか、喜びが伝わるのか。

はっきり言ったら殆ど効果がないと言っても、言い過ぎではないかも知れません。

でも、大事なことは、伝わったからいい、伝わらないからダメという問題ではなく、せっかく信仰している、この、一つひとつの喜びを、ただ自分のものだけにせずに、少しでも、人の耳に届ける、人の目に届ける、何でもいいから、外に向かってすること自体だと思います。

そしてそれが、大きな理作りとなり、自分自身の励みにもなって、その理でもって、今度は、教祖百三十年祭に向かって、より大きな歩みに繋げることもできるし、そのことによって、正しく、おつとめ奉仕人という一つの結果もお見せいただく大きな理作りにもなるのではないか。

だから、百二十周年で、理作りをした結果を出すということではなく、飽くまで、百三十年祭に向かう理作りの一環としての百二十周年の歩みだと、改めて、心においていただきたい。

◎「喜びに満ち溢れた記念祭」を目指して

そして、今年一年は、笠岡に繋がるよふぼく・信者の端々に至るまで、どんな形でもいいから、とにかく一日一回、必ず外に向かって出てもらうようにご丹精をお願いしたい。

皆さん方が、自ら通ることはもちろんさることながら、よふぼく・信者の丹精もしていただきたい。

「さあ、では、パンフレット持ってやりなさい」と言えば難しいと思うので、せめて、日々の会話の中でもいいから、喜び・感謝の気持ちを発するぐらいできるだろう。

笠岡に繋がるみんなが、どんな形でもいいから、外に向かって発信することができたならば、これは、親神様・教祖に「よくつとめてくれた、いい百二十周年だ」と大変お喜びいただける記念祭を迎えることができるのではないでしょうか。

この三年千日の歩み、仕上げの年、日々の理作りに励みながら、今度は、家族共々の理作りに繋げ、そして、少しでも外に向かっての歩みができる今年一年にさせていただきたい。

どうぞ、皆さん方、今年一年、何でもどうでもと勇んでおつとめいただきたい。

◎記念祭までに心定めの完遂を！

それを実際にやっていく上で、本年のそれぞれの教会の心定めに関しては、記念祭までに完遂しようと、申し合わせをさせていただきます。

本来なら十二月末日までですが、今年は、もっと勇みを付けようということで、一ヶ月前倒しにして、記念祭までに、それぞれの教会の心定めを完遂できるようにしたい。

その一つの材料としては、先ず、「一」を目指したい。

初席者も「一」から始めないと、当然「五」も「十」もできません。最初から「十」ではなく、先ず「一」から始めよう。修養科生も、いっぺんに三人も四人もではなく、先ず一人。

それを目指すために、日々の「一」を、それぞれで付けたらいいのではないかなと思います。

「外に向かって第一歩、今日は歩めた」、「二日目、今日も一歩歩めた」それも、いいのではないでしょうか。

心定めの数字には現われない部分、例えば「中席者、一名、おぢばがえりしてもらうことができた」。おぢばがえり・別席に関係なくても「一人、おぢばに帰っていただけた」、「学生生徒修養会、一人出てもらった」、「食堂ひのきしん、一人出てもらった」、何でもいい。

今年は、「一」にこだわり、日々「一」を積み重ねることによって、心定めを完遂できる、そんな思いがいたします。

◎「一」の表を付けて、勇みの種にしよう！

それで、その「一」を、自分で表にして、それぞれの励みにされたらいいのではないでしょうか。

心定め以外の数字に関しても、大教会の方で、表にして、それぞれの教会にお渡ししますので、それを毎月付けて、祭典報告書に添えて提出していただければありがたい。

飽くまで、心定めを完遂する上での、一つの励みとして、先ず、自分で「今日、一つできた。今日、一つできた。」という励みとして、そういうものを活用していただければありがたい。

それぞれの教会の数の報告書は、一応、お渡しします。出せるところは出してください。それが苦になると勇みに繋がらなくなりますから、強制はしません。（祭典報告書は必ず出してください）

でも、それが、「よし、勇みとさせてもらおう」というところは、祭典報告書に合わせて、その数字の報告書も出していただければありがたいと思うところです。

報告が面倒くさいと思われるところは出さなく

て結構です。でも、そういうもの一つひとつが励みになってくれればありがたい、そんな思いもいたします。

よふぼく・信者さん方も、何かしらさせていただいたら「一つ」、何かさせていただいたら「一つ」、そんなものも一つの励みとして持っていただいて、自分で、そういう表作りをしていただくのもいいかとも思います。

◎とにかく勇んで、勇んで、つとめよう!!

後はもう、細かいところはそれぞれでお任せするとして、一応、そういう形で、本年一年、外に向かって何か、どんな形でも歩ませていただく、毎日少しでもさせていただく一年にさせていただきたい。

どうぞ、今年一年、とにかく勇んで、勇んで、つとめさせていただいて、本当に信仰の喜びに満ち溢れた記念祭を迎えさせていただきましょう。

《以上要約》

立教174年 春季大祭

実践項目に込められた思いの消化と実行を

立教174年大教会春季大祭は1月21日、大教会長様祭主のもと役員、部内教会長、布教所長、よふぼく、信者ら多数の参拝のもと執り行われた。大教会長様は神殿講話で、春季大祭の元一日から話を起こされ、「春の大祭と創立百二十周年成人の歩みの関わりについて」と題して、「広げよう」に込められた思いと仕上げの年の歩み方について、前日の年頭会議に続き話された。要旨は次の通り。

◎教祖が御身をお隠しなされた意味

春の大祭の意味は――

私たち一人ひとりの成人の歩みを急き込む上から、教祖が御身をお隠しなされたとお聞かせいただきます。

当時の方々は、おつとめの大切さは分かっていながら、いろんな事情から、なかなかつとめることができなかった。

何としてでもして、おつとめをつとめてもらいたいが、現身を以てたすけ一条の先頭に立っておられると、どうしても、一人ひとりの自発的な成人の歩みが進みにくい。そんな思いがあったのでしょうか。

御身をお隠しなされた後、本席様を通して、おさづけを一人でも多くの人に渡したいとの思いをお聞かせいただきました。

つまり、御身をお隠しなされたのは、つとめの急き込みと同時に、さづけを渡すということに、大きな意味があったとお聞かせいただくのです。

◎つとめとさづけを急き込まれた訳

教祖が御身をお隠しなされる直前の様子を『教祖伝』から拝読したいと思います。

二月十七日夜（陰暦正月二十五日夜）、今にして思い返せば、教祖が現身を以てこの世に現われて居られた最後の夜であるが、この夜、教祖のお身上宜しからず、飯降伊蔵を通して伺うた処、

さあ〳〵すっきりろくぢに踏み均らすで。さあ〳〵扉を開いて〳〵、一列ろくぢ。さあろくぢに踏み出す。さあ〳〵扉を開いて地を均らそうか、扉を閉まりて地を均らそうか〳〵。

とのお言葉である。

人間は、親神の目から御覧になれば、皆一

列に兄弟姉妹である。魂の理から言うならば、些かも高低上下の差別はない。ろっくの立場、一列兄弟の立場に於いて、総ての人々が語り合う処にこそ、陽気ぐらしの世界への門出がある。即ち、人々の心をろっくの地にしようと思うが、さて、扉を開いて地を均そうか、扉を閉めて地を均そうか。

と、問われた。

（第十章 扉ひらいて）

とあります。

「ろっく」とは、それぞれの与えられた立場などに一切かかわらず、人間は「一列兄弟」として平等だということ。

その「一列兄弟」が、語り合いたすけ合うところに、「陽気ぐらしの世界への門出」、つまり、陽気ぐらしに向かう入口がある。

すなわち、「一列兄弟」として平等にたすけ上げていくことが、ろくぢに均すことになるわけです。

大祭の意義、仕上げの年の歩みを話された

つまり、つとめを急き込み、御身を隠してさづけを渡されたのは、ろくぢに均すためだったということ。お互いに、ここに思案をいたさねばならないと思うのです。

つとめを急き込まれたからつとめをする、おさづけをくださったからおさづけを取り次ぐ、これも大きな御用ですが、身上者におさづけを取り次ぐだけではなく、「ろくぢに踏み均す」ということも合わせて思案することが大切だろうと思います。

例えば、おさづけをお取り次ぎする前の「一言はなし」・「話一条」ということを考えてみれば、ここに「ろくぢに踏み均す」という意味合いが込められていると言えるのではないかと思います。

そうしたときに、

一列兄弟の立場に於いて、総ての人々が語り合う処にこそ、陽気ぐらしの世界への門出がある。

と仰るように、私たちの使命は、正しく、今、つとめとさづけを通して、いかに人々に語りかけるかということ。

そうすることで、ろくぢに踏み均す――陽気ぐらしに向かう門出に立つ――ことができるのだろうと思います。

◎信仰者らしい立ち振る舞いや言葉遣い

さあ、これを思案したときに、では、お道の人は、世間に対して、何を語り合うのか。

世間話をするだけなら別によふぼくでなくてもできますから、よふぼくとしての語り合いということになれば、日々の会話の中にこそ、よふぼくらしい言葉、教祖の名代としての喜び・感謝の言葉というものが、込められて当然です。

にをいがけするときに、つい、私たちは、神様の御用だからといって神様のお言葉をお取り次ぎしなければならないと、構えてはいないか。

神様のお言葉をお取り次ぎすることを、余りにも意識しすぎてしまってはいないか。

しかし、肝心なことは、日々の生活の中での、何とも言えない、信仰者らしい立ち振る舞いや言葉遣いであって、そういうものが、より人々には、むしろ、受け入れ易い。

一緒に仕事しながらでも、「あの人とやってると何かしら楽しい、あの人といると、何か心が豊かになる」。別に特別なことをしているわけではなくても、「あの人の言葉遣いから、何かしら温かさを感じる。何か安らぎを感じる。」

◎安らぎを与えられるよふぼくに

今、多くの人々は、安らぎを求めるために、あるいは、休日に旅行・温泉に行くために仕事をし

ているようなものです。

それが悪いとは思いませんが、本来は、余所に求めなくても、身近な日々の生活の中に、心の安らぎはあるはずだと思います。

余所にストレス発散や安らぎを求めれば求めるほど、余計に、今の生活はストレスが溜まってしまうのであって、むしろ本当は身近なところにそういう安らぎが見出せるならばこれほどありがたいことはないのです。

私たちよふぼく一人ひとりが、そういう安らぎを与えられる人になれたら、正しくこれは、「私だけ」ではなく、周りの人も共々に陽気ぐらしに向かう一つの道筋を、創り上げることができるのではないかと思います。

◎「自分自身」の「信仰の喜び」ということ

そこで、改めて、百二十周年に向かうこの三年千日の歩みを思案していただきたい。

「初代の心にかえり信仰の喜びを」、「深め」、「伝え」、「広げよう」と申しています。

別席者を作ろうとか、初席者を出そうとか、修養科生を出そうとか、この百二十周年に向かっての歩みは、何もそういうことを求めているわけではありません。（教会ごとの心定めについては、もちろん、しっかりしなければならないとは思いますが。）

むしろ、教祖百三十年祭に向かう大きな歩みに繋げるための基礎作り・体力作り、大きく飛躍するための伏せ込みの三年間なのです。

その伏せ込みは何かと言えば、正しく「喜び、喜び、喜び」。

自分自身が信仰の喜びを「深め」、自分自身が信仰の喜びを家族に「伝え」、そして、自分自身が信仰の喜びを「広げ」ていこうということです。

三年目になって初めて申しますが、「深めよう 伝えよう 広げよう」の「広げよう」については、「広めよう」にしようかという案もありましたが、敢えて「広げよう」にしたのには、一つの思いがありました。

「広める」という言葉は、「私でなくとも」、あるいは、単に「親神様・教祖の思召をお取り次ぎするだけ」でも「広める」ことにならないか。

つまり、「私」が別に信仰の喜び・感謝の気持ちを持っていなくても、「教祖がこう仰った、親神様はこういう思召」を伝えるだけで、これは「広めよう」にできるでしょう。

でも、「私」が「自らの信仰の喜びを」人に伝えていくということを明確にするには、やはり、「広げよう」の方が伝わりやすくはないかという思いです。

だから、スローガンの言葉一つひとつにも、大きな意味があることを、改めて知っていただきたい。

◎「一日一件にをいがけ」とは

そこで、今年は、その「広げよう」の行ないをしっかりとつとめ切ろう。そしてそれが「一日一件にをいがけ」です。

「にをいがけ」というと、「また、パンフレット持って歩かなあかんのか」と思うかも知れませんが、そうではありません。

もちろん、それなりの立場の人は、それなりのこと、正しく、パンフレットを持って、あるいは身上者のところへ、しっかりとおたすけに行き、つとめなくてはいけませんが。でも、誰も彼もができるわけではありません。

それでは、誰でもできる「一日一件にをいがけ」を、とにかくさせてもらおうではないか。

それは何かと言えば、喜び・感謝の言葉をただ発すること、外に向かって発することです。「有難いですね。結構ですね。嬉しいですね。」そういう喜びの言葉を一人でも多くの人に声掛けをす

ることです。

例えば、会社に行く。「おはようございます、今日も一日頑張りましょう」ぐらいの会話は誰でもすると思いますが、せっかくですから、「おはようございます。今日もいい天気ですね。有難いですね。嬉しいですね。今日もこうやって身体も元気ですね。有難いですね。さあ、一緒に頑張りましょう。」

これで「有難いですね。嬉しいですね。」の声掛けができました。

仕事が終わり、「今日も元気で働けた。嬉しかった。結構やった。では先に失礼します。」

それだけでは申し訳ない。もう少し、何かしようというなら、では、ひのきしんをしよう。毎日、近所を掃除しよう。ただ掃除するだけ、それだけでも、喜びを伝えることになるかも知れません。

せっかくですから、「有難いな、嬉しいな」と独り言のようにでも言いながら掃き掃除していると、通る人がそれを聞いて「何か、怖い人やな、おかしな人がおるな」と思われるかも知れない。でも、「有難いな、嬉しいな」という言葉をひょっと耳にしたら、それだけでも、伝えることになりはしないですか。

日々の会話の中で「ありがたい」・「結構」と喜びの言葉を掛けていく、日々の行ないの中で「ありがたい」・「結構」という態度を現わし、また、それを声掛けに繋げていく。その一つひとつ、誰でもできると思います。

「一日一件にをいがけ」、特に難しいことをせよと言うのではないのです。

よふぼくとしてできる「一日一件にをいがけ」を、今年一年、一生懸命やっていきましょう。それを申し上げているのです。

どうでしょうか。

◎「広げる」ということ

そのためには、自分自身が、今まで培ってきた、日々の喜び・感謝、日々の理作りはしっかりと続けなくてはいけないし、子どもにも、しっかりと声を掛けていかなくてはいけない。

子どもだけではなく、今度は、親族にも、声を掛けていかなくてはいけない。そして、全く知らない人にも、あるいは、日々の生活の中で付き合いのある人に、言葉を掛けていく。

その一つひとつを、毎日、しっかりすることによって――より大きな喜び・感謝というものが、自分を通して世の中に広がっていくことができたなら――また、単なるあいさつの中にも「嬉しいな」といって、心が安まるようなものを感じていただけたなら――大きな理作り、たすけになり、正しく、ろくぢに踏み均す入口に立つことができるのではないでしょうか。

改めて思案していただきたい。

◎「喜びの連鎖」を起こす「発信源」になろう

「初代の心にかえり信仰の喜びを深めよう」・「信仰の喜びを伝えよう」・「信仰の喜びを広げよう」であります。

喜びの心を「一日一件にをいがけ」させていただく一年としたい。

そして、一人でも多くの人に声掛けする中に、記念祭にも参拝してもらう、また、教会にも来ていただく人ができれば、また、親神様・教祖はお喜びです。そうやって、喜びの声を掛けるだけでも、親神様・教祖は、お喜びでございます。

そうして、一人でも多くの人が寄ってくるということになれば、また喜んでくださる。喜んでいただければ、また、喜びの理を頂戴させていただく。

今、世の中は逆のことばっかりやっています。口を開けば不足ばかり、愚痴ばかり。政治の悪口、教育の愚痴、人の悪口。悪口・悪口は悪口しか招

きませんから、回り回って結局は自分自身が苦しまなければならなくなってしまいます。世の中の悪循環は、より悪循環へと回ってしまいます。

しかしながら、一人ひとりの喜びの心は、喜びの心を広げていき、そして、いずれまた、喜びの心として我が身に返ってくる。喜びの連鎖があるのです。

その、一番肝心要の喜びの発信源に、私たちはならせていただく。これが、今、一番大事な、私たちの使命ではないでしょうか。

◎世相から見えること

今、世の中で「孤独死」が問題になっています。人との関わりを断ち、また、親子の関わりをも断って、独りで生活していく。

子どもに迷惑を掛けたくないのが親心と言えばそうかも知れませんが、私に言わせれば、それは間違った親心でしょうね。子どもに迷惑を掛けるのも親心です。

人間は、少なくとも、独りでは生きていけないし、独りでは陽気ぐらしができないように造られています。

人間創造・元の理のお話を思い起こせば、お解りかと思います。

男と女をお造りになりました。夫婦をお造りになられました。そして、八千八度の生まれ替わりによって、人間が生まれてきた。男と女が生まれてきた。

男だけでもないし、女だけでもありません。少なくとも夫婦としてたすけ合って、人間は陽気ぐらしできるという御教えでもあるのではないでしょうか。

今、離婚流行りの世情ではありますが、改めて、夫婦ということの大切さも、思案しなくてはいけないと思います。

ただ、夫婦だけではなく、親子も、そして、回りの人々とも、人間は、少なくともたすけ合って生きて初めて、陽気ぐらしができるように造られているということは、少なからず、そのことから考えても理解できると思います。

ところが、今の世の中の人々は、人との関わりを断って、独りの方が楽だから、自由気ままに生きられるから独りになりたい、といって独りになりたがる人がいる。

しかし、そうすればするほど、余計にいろんな事件・事故が巻き起こって増えてきているのも確かです。独りになりたがることによって、独りを目指せば目指すほど、陽気ぐらしからは遠退いてしまう現実があるということです。

◎「語り合い」は「たすけ合い」の第一歩

だからこそ、今、私たちは、一人でも多くの人に声を掛けることが大切だということです。

お互い人間同士が、たすけ合う、その第一歩は「語り合い」ではないでしょうか。

総ての人々が語り合う処にこそ、陽気ぐらしの世界への門出がある。

正しく、そこに尽きると思います。

とするならば、私たちよふぼく一人ひとりが、日々の生活の中での喜び・感謝の気持ちを、語り伝えていくことが一番大切で、今、求められている御用だろうと思います。

どうぞ、一人でも多くの方が、このスローガン、そして実践項目に込められた思いをしっかりと消化し、今年一年、しっかりと実践に掛かっていただきたいと思うところです。

パンフレットを持ってにをいがけに出るときも、単に神様のお言葉を取り次ぐのではなくて、喜びもしっかりと添えて、にをいがけ・おたすけにと励ませていただく一年にしたいと思います。

どうぞ、勇んでつとめさせていただき、悔いのない一年、本当に満足のいく一年にさせていただきましょう。

《以上要約》

「お帰り講話」実施

1月25日・詰所

布教部

布教部（中村剛部長）は1月25日、午後7時から約1時間半、詰所修練場で、田浦道則先生（湖東大・河田原分教会長）を講師に迎え「お帰り講話」を実施、宿泊者など約100人が参加した。

文字を題材に講話される田浦先生

先生は「真柱様は継承奉告祭の諭達の中で、現在、社会問題になっている家族団欒、親子の絆の希薄を指摘されている」と前置きされ、「暮らしは豊かになったが、心は貧しくなっている。子どもの育つ環境の中で手本となるのが、夫婦の円満と、それぞれの役割の重要性、また親が親孝行する姿を子どもに見せることが大切」と自らの布教体験を通して話された。

そして「親神様から、人類にとって一番大きな夢〝陽気ぐらし実現〟を託されているお互いよふぼくは、誇りをもって〝勇む心・喜ぶ心〟を常に心の糧として、成人の歩みを進めていこう」と結ばれ、最後に、自身で作られ、生涯の誓いと心に定められた「夢努（ゆめゆめ）・勇喜」という言葉を参加者にお土産として下された。

信仰心を次代に伝えよう

創立100周年委員部長の集い

婦人会

婦人会笠岡支部（上原きよ代支部長）は1月30日、大教会で同支部創立100周年委員部長の集いを開催、104名が参加した。

昨年4月19日、本部婦人会創立100周年を盛大につとめ終えた後、本会から「全支部で委員部長講習会開催」という活動方針が打ち出され、これを受け笠岡支部も本年創立100周年を迎える上から、これまでの同支部の100年を振り返ると共に、先人の歩みを学ばせて頂こうと、講習会、集いを兼ねて行われたもの。

まず神殿で参加者全員が十二下り総立ち手おどりをつとめた。

この後、会場を講堂に移し、上原きよ代同支部長は「創立の元一日である初代・上原さと様より、

参加者全員による十二下り総立ちてをどりまなび

現在５代に至る迄、100年続くことの大切さ、つなげることの有難さ、また〝百という字は白紙に戻り一より始めるをいう〟ことから今一度、それぞれの信仰の元一日を振り返り、100年つないで下さった先輩方に喜んで頂くには、まず自分自身の信仰の見返しが大切であり、自身の信仰心をしっかり固めて次代に伝えてもらいたい」と挨拶。

午後からは、上原順子（陶山）、猪原ひとみ（門司港）の両委員部長が委員部の活動を通しての感話を行った。

その後、参加者を18班（６人制）に分け○支部長挨拶を聞いての感想○本会の活動方針の再確認――などについてねり合われ、笠岡につながる全委員部長が、まず足並みを揃え少しでも前進させて頂こうと誓い合い閉会した。

◈雅楽勉強会

雅 鶯 会

各教会の月次祭に雅楽を奏でよう。

【と　　き】　２月２７日（土）
【対　　象】　初心者・初級者（少年会員、一般）
【内　　容】　初心者は、雅楽の基礎から勉強を、また初級者は平調の越殿楽が合奏できるよう勉強します。
【と こ ろ】　大教会
【講　　師】　大教会雅楽奉仕者
【参 加 費】　３００円
【申し込み】　２月２０日までに大教会に申し込み

※楽器は各自持参ですが都合がつかない人はご相談に応じます。

◈春の学生おぢばがえり

【と　　き】　３月２８日（月）
【内　　容】　午前　９時～　　式典「真柱様のお言葉」
　　午前１１時～　　直属アワー・別席
　　夕づとめ後～　　後夜祭

◎笠岡大では今回、初めて模擬店「ひるぜん風焼そば」を出店します。

◈鼓笛講習会

【日　　時】　３月３０日　　１２時半　　受付
　　午後１時　　開講
　　４月　１日　　午前８時 まで
【参加お供】　１０００円とお米３号

＊縦の伝道といえば 鼓笛！
歴史ある鼓笛隊で少年会のリーダーを育てましょう！
隊員・係員 大募集

おぢばで、大教会で、さあ!! ひのきしん

青年会

青年会笠岡分会では、大教会創立120周年を迎える今年、『おぢばで、大教会で、さあ!!ひのきしん』をテーマに掲げています。具体的には、「おやさとふしん青年会ひのきしん隊（14名での入隊）」と、「創立120周年青年会毎月ひのきしん」を柱に活動を展開しています。

1月30日(日)には、第1回目となる1月の「創立120周年青年会毎月ひのきしん(以下：毎月ひのきしん)」を実施し、客殿庭への砂利入れと、参道周辺の清掃を行いました。この日は、朝より冷え込みがきつく、時折粉雪が舞う中でしたが、教会・家族ぐるみで足を運んだ23人の参加者は、寒さも厭わずひのきしんに励みました。

この毎月ひのきしんでは、記念祭を迎えるにあたり、手入れ・整備が必要な箇所を中心に作業をする事となっております。どなたでも参加可能ですので、真柱様お入り込みに向けて1ヶ所でも、1回でも多くひのきしんに携わっていただき、共々に感動の11月30日を迎えましょう。

尚、毎月ひのきしんに参加して頂いた方、先着100名に帽子をプレゼントしております（5色の中から好きな色をどうぞ）。全ての実施日が、日曜日ですので、教会・家族ぐるみでご参加よろしくお願いいたします。（実施日等、詳細につきましては、各教会配布のポスター、又は『かさおか』1月号に記載しております）。（青年会笠岡分会委員長　上原繁次）

粉雪が舞う中、ひのきしんに励む参加者

委員・直轄委員部長 研修会 開催

婦人会

婦人会笠岡支部（上原きよ代支部長）は２月３日、大教会で同支部委員、直轄委員部長を対象に本年の初例会を兼ねた研修会を開催、36人が参加した。

開催にあたり、上原きよ代同支部長は「今年の婦人会活動の要は委員部長の成人であり、そのために支部婦人会の創立の日を始めとして委員部長講習会、また支部長と委員の懇談、そして委員部での集い、例会をさせて頂きたい。

親の心と人間の心には隔りはあるけれども、教祖が先頭に立って御存命同様にお働き下されるその結果として、今日の親の心に近づく道の姿にまで導かれた。出来ても出来なくてもまず素直になる心をもち、親にもたれて精一杯つとめる心を定めて通らせて頂こう」と話され、また同研修会で行う、神名流しについては「教祖にお出まし頂き、共々にお歩き下さる様お願いをして、今年一年の笠岡支部の動きの上に繋がれば有難い」と挨拶。

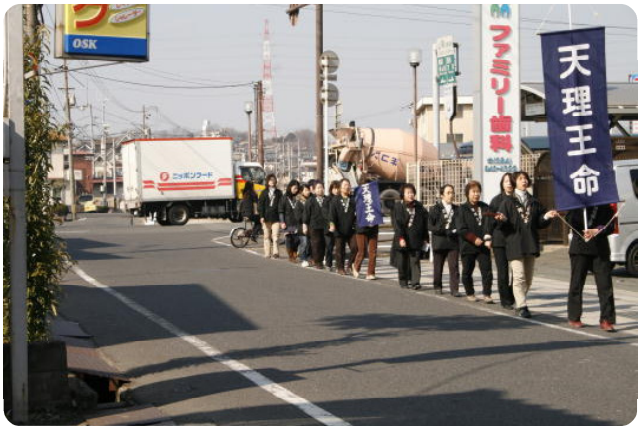
神名流しは、笠岡駅から旭ヶ丘団地までと大門駅から大教会までの２コース。それぞれ18名に分かれ、のぼりを立て、拍子木の音に合わせてみかぐらうたを唱和し行った。

参加者の１人は「のぼりを先頭に拍子木を打ちながらの神名流しに大いに勇みました」と話していた。

昼食は鍋パーティーで親睦を深め、今年一年の奮起を誓い閉講した。

▲（笠岡駅班）
▼（大門駅班）

勇んで神名流しを



◈おつとめまなび総会

【と　　き】　４月１日(金)
【内　　容】　午前　祭儀式・おつとめまなび
　　午後　模擬店・ゲーム
【参加お供】　各教会　千円
【役　　割】　坐りづとめ・よろづよ八首　　直轄教会
　　１、　２下り目　　高屋ブロック
　　３、　４下り目　　西ブロック・府中市ブロック
　　５、　６下り目　　上下ブロック
　　７、　８下り目　　島根ブロック
　　９、１０下り目　　東ブロック
　　１１、１２下り目　　福山ブロック

＊教会おとまり会などで練習した成果を親神様、教祖にご覧いただきます。

教会おとまり会の報告

▼錦ヶ原隊

実 施 日　平成２２年１１月１３日・１４日
参加者数　少年会員９人（幼 ３人）　育成会員４人　合計１３人
プログラム
１３日（土）１５：００　集合、参拝、お話し。
１６：００　カレー食の準備（参加者）。
１７：００　おつとめの練習、掃除ひのきしん。
１７：３０　夕づとめ。
１８：００　夕食（カレー食）。
１９：００　紙芝居、お道の歌、自由時間、入浴。
２２：００　消灯、就寝。
１４日（日）　６：３０　起　　床。
７：００　朝づとめ。
７：３０　朝食（おにぎり、みんなで作る）。
９：００　浦安公園（２時間）。
１１：００　昼食の準備（ハンバーグ作り）。
１２：００　昼食（ハンバーグ定食）。
１３：００　掃除ひのきしん。
１４：００　解　　散。

所　　感　このたびのおとまり会へ参加してくれた子供達は、今年のこども団参へ参加してくれた玉島の子が多く、スムースにおとまり会が出来たと喜んでおります。また、２日間の食事も、子供達が中心となり、作り、みんなで和気あいあいと頂きました。夜の行事では、上級の教会で借用した紙芝居を子供達が交替で行ない、大変好評でした。また、２日目は、近くの浦安公園へ移動、楽しく時を過しました。次回は、夏休みの期間に実施するとの約束をして、名残惜しむ中解散致しました。

▼東悠隊

実 施 日　平成２２年１２月３１日・平成２３年１月１日
参加者数　少年会員３人　育成会員６人　合計９人
プログラム
１２／３１　教会大掃除ひのきしん及び元旦祭準備手伝い。
１／　１　元旦祭参拝。

所　　感　大掃除ひのきしんでは近隣のゴミ拾いも実施した。
鳴り物を練習して、朝夕のおつとめもつとめた。

立教174年　定期巡教表

教会名	巡教月日	巡教員	教会名	巡教月日	巡教員	教会名	巡教月日	巡教員
廣町	2月13日	佐藤道孝	香地華	3月 9日	大教会長様	品治	2月 7日	岡崎真一
福廣	2月 7日	森本忠平	真金	2月11日	森本忠平	久福	3月 8日	岡崎和夫
福勇	3月11日	谷内伸自	仲條	2月 8日	中島誠治	久津	2月 9日	吉岡壽
福芦	2月 9日	上原繁道	稲倉	3月13日	中村剛	呉福	2月 5日	田中一之
福満	2月 8日	岡崎真一	稲瀬	2月 5日	森本忠平	鶴南	2月 8日	上原繁道
福岩	2月12日	大教会長様	稲富士	3月15日	中村邦義	鶴眞	3月10日	佐藤道孝
西村	3月10日	大教会長様	稲讃	3月10日	谷内伸自	川島郷	3月10日	大教会奥様
福年	2月 7日	佐藤道孝	門司港	3月12日	田中一之	鴨方	2月 6日	岡崎真一
引野	2月 6日	笹尾正治	大恵山	3月12日	吉岡壽	作備	2月 6日	田中一之
福昭	2月11日	大教会長様	東水島	2月10日	森本忠平	輝華	3月13日	大教会奥様
福春	3月 5日	吉岡壽	髙児島	2月 5日	笹尾正治	錦ヶ原	3月 3日	田中一之
福中	2月12日	吉岡壽	出雲	3月11日	岡崎和夫	行縢	2月11日	田中一之
福冨士	2月10日	大教会奥様	瑞雲	2月 6日	中村剛	真府	2月 9日	中島誠治
福東	2月 9日	岡本久善	海潮川	2月 8日	中村剛	吉舎	2月 4日	岡本久善
東福山	2月 6日	上原繁道	錦洋	2月14日	大教会長様	清嶽	2月 5日	吉岡壽
福南	2月13日	大教会奥様	米府	2月15日	大教会長様	上小畠	3月10日	岡崎真一
福順	2月11日	佐藤道孝	弓ヶ濱	2月 8日	中村邦義	木津和	2月 6日	中村邦義
福節	3月 8日	中島誠治	西伯	2月 9日	中村邦義	國須	2月 7日	岡本久善
福備	3月 3日	岡崎和夫	米美	3月 5日	大教会奥様	上吉野	3月12日	上原繁道
福輝	3月13日	佐藤道孝	伯仙	2月10日	中村邦義	上備	2月 8日	佐藤道孝
坪生	3月 5日	中島誠治	照雲	3月 6日	大教会奥様	河佐	3月 4日	大教会長様
八尋	2月10日	中島誠治	松都	2月 7日	中村剛	上川邊	2月12日	上原繁道
深安	2月 6日	森本忠平	樺島	7月 3日	谷内伸自	甲井	3月 6日	岡崎和夫
笠尋	3月 3日	大教会長様	新輝豊	3月 3日	大教会奥様	上父	3月 7日	岡崎和夫
芦品	2月13日	岡本久善	亀田山	2月12日	笹尾正治	阿木行	3月 2日	岡本久善
安那	3月 8日	岡崎真一	出雲川津	3月10日	岡崎和夫	宇津戸	3月 5日	上原繁道
芦田川	3月 3日	中村剛	天場山	2月 8日	谷内伸自	河面	3月 8日	笹尾正治
三郡	3月10日	中村邦義	簸ノ川	2月10日	谷内伸自	府鮮	3月13日	吉岡壽
芦常	2月 5日	岡崎真一	多古浦	2月13日	笹尾正治	府世原	2月12日	佐藤道孝
芦加茂	3月 6日	上原繁道	瑞北	2月 9日	谷内伸自	神驛	3月 5日	森本忠平
惠陽	2月14日	中村剛	雲東	2月11日	谷内伸自	神免	3月 8日	上原繁道
陽實	3月12日	岡本久善	呉中	3月 8日	佐藤道孝	葦沼	2月 7日	田中一之
御野	2月 8日	吉岡壽	大江橋	3月 5日	岡本久善			

教会別人づくり一覧表（立教173年１月１日より 立教173年12月31日まで）

名称	初	授	修	講前	講後
笠岡	8	3	4	1	
福山	5				
髙屋	2	2			
神邊		1			
島根	1				
久松	1	1	1	1	
鶴山	2				
弥髙山	1	1			
陽備					
摩耶					
金浦					
興明		2			
ひろさと					
陶山	2				
芳井					1
呉照	1				
海松ヶ岡	1		1		
東悠	1				
吸江		5	1		
照陽	1				
輝美濃		1			
新山邑		1			
呰部					
明石市					1
上下	1	1			
府中市	2				
東城		2	1		
服部					
島中					
驛家	1				
油木					
葦陽	1	1			
湯田原	2	2			
備中	3				
神昭					
美之郷					
錦備					
笠晴	4				
廣町	1	1	1		
福廣					
福勇		1			
福芦	2	3	1		
福満	1		1		
福岩		1	1		
西村		1			
福年					
引野					
福昭					

名称	初	授	修	講前	講後
福春					
福中					
福冨士					
福東	1	1			
東福山	1	1	1		
福南	1				
福順					
福節		1			
福備					
福輝					
坪生	2				
八尋					
深安					
笠尋		2			
芦品			1		
安那					
芦田川					
三郡					
芦常		1	1		
芦辺					
芦加茂	1				
恵陽					
陽實		2			
御野					
香地華					
真金	1				
仲條					
稲倉	11	8	4		
稲瀬	3	1			
稲富士					
稲讃					
門司港					
大惠山	3	1	1		
東水島	2				
高児島					
出雲	2	2			
瑞雲	1	1			
海潮川					
錦洋					
米府			1		
弓ヶ濱					
西伯					
米美		2			
伯仙					
照雲				1	
松都			1		
樺島					

名称	初	授	修	講前	講後
新輝豊		1			
亀田山	1				
出雲川津	1				
天場山					
簸ノ川	1				
多古浦		3	1		1
瑞北					
雲東					
神村		1	2		
呉中					
大江橋	2			1	1
品治		1			
久福					
久津					
呉福					
鶴南					
鶴眞					
川島郷	2	1			
鴨方					
作備		1			
輝華					
錦ヶ原					
行滕					
眞府					
吉舎					
清嶽					
上小畠					
木津和					
國須					
上吉野					
上備	1				
河佐					
上川邊					
甲井	3		1	1	
上父	1	1			
阿木行					
宇津戸			1		
河面					
府鮮			1		
府世原					
神驛	1				
神免					
葦沼					
合計	86	62	28	5	4

春季大祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます
親神天理王命の御前に 会長上原理一 慎んで申し上げます
親神様には一れつ子供の陽気ぐらしを楽しみに 道具を引き寄せ守護を教え 八千八度の生まれ替わりを経て 人間世界をお創造下されたばかりでなく 天然自然のお働きと身体の自由の御守護を通してお育て下さっております 加えて「月日にハとのよな事も一れつに みなにをしへてよふきづくめに」と旬刻限の到来と共にこの世の表にお現れになり 教祖を月日の社と定めて万いさいをお明かしになり ひながたを示して 陽気ぐらし実現へとお導き下さっております事は誠に有難く勿体ない極みでございます このお道にお引き寄せ頂いた私共は御守護の有難さに朝夕お礼申し上げると共に 御恩報じを念じて 世界一列救けたいとの思召にお応えすべく 日々はたすけ一条の御用の上に勤め励ませて頂いております
その中にもこの月二十六日は月日の社たる教祖が 二十五年先の定命を縮めて世界ろくぢに踏み均しに出られた尊い日柄に当たり おぢばで春の大祭が執り行われますので 理のお許しを頂いて 当教会にても只今からおつとめ奉仕人一同喜び心 たすけ心も一入に明るく陽気に勇んで坐りづとめてをどりをつとめて 春の大祭を執り行わせて頂きます 御前には寒さ厳しき中も厭いませず 今日の日を楽しみに寄り集いました道の子供達が真実の丈をお供えし 声高らかに相共にお歌を唱和し 同じ思いに伏し拝み 尚も変わらぬ親心にお縋りする状を御覧下さいまして親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます
さて本年立教百七十四年は大教会創立百二十周年の年で 十一月三十日の記念祭に向け三年千日と仕切って成人の歩みを進めて来た仕上げの年でございます 過去二年間 「初代の心にかえり信仰の喜びを深め伝える」事に特に力を入れて成人の歩みを進めてまいりました 本年は仕上げに当たり「広げ」に当たる「一日一件にをいがけ」に特に力を入れて成人の歩みを進めさせて頂く所存でございます その徹底を計るべく 今月は直轄教会への大祭参拝をさせて頂きました 又二月三月には部内巡教をさせて頂き 部内教会はもとより用木信者の隅々に至るまで徹底を計り 一人でも多くの人に信仰の喜びが伝わるよう一手一つの心で外に向かってにをいがけに邁進させて頂く所存でございます
何卒親神様には春の大祭に当たり 世界ろくぢに踏み均しに出られた教祖のお心に応えるべく かくお誓い申し上げる皆の誠真実の心をお受け取り下さいまして にをいがけを通して一人でも多くの人に信仰の喜びが伝わり お望み下さる陽気ぐらし実現へ一歩でも近づく喜びに満ち溢れた にぎやかな創立百二十周年記念祭を迎えさせて頂けますようお導きの程を 一同と共に慎んでお願い申し上げます

◆別席ひのきしん団参

実行委員会

【と　　き】　６月２５日（土）～２６日（日）
【内　　容】　２５日　午後１時　　東礼拝場にておつとめ、別席、ひのきしん。
　　午前７時　　記念講演（詰所）
　　講師・川島一郎先生（甲賀大・勢津分教会長）
　　２６日　本部月次祭参拝・別席。

何でも心定めの完遂を！

教会長講習会 開催

髙屋分

髙屋分教会（武内正美会長）は２月17、18日の両日、同教会で立教174年教会長講習会を開催、教会長ら28人が参加した。

同教会につながる教会長が一手一つに歩むため毎年開かれているもので、今回は大教会創立120周年記念祭に向けての仕上げの年に、一丸となって本年の心定めの完遂目指しつとめさせて頂こうと開かれたもの。

武内同会長が「機を逃さぬおさづけ、おたすけの実行。自ら動かなければ何も変わらない。今年、髙屋につながる教会長は〝いち布教師〟との思いで日々を通って頂きたい。それが本年の心定め完遂につながる」と挨拶。

引き続き、矢田哲一八尋分教会長、吉岡貞彦芦田川分教会長が「教会長拝命以来の日々の通り方、今後の決意」について感話。夕づとめ後、親睦会があり信仰談議が活発に行われた。

時間を忘れる程、熱のこもったねりあいが行われた

２日目は、ひのきしん、朝づとめから始まり、道友社制作の「布教活動」「教会おとまり会」などを紹介したビデオ鑑賞。

この後、平野晋先生（東本大・道竹分・西大寺布教所長）の講話が行われた。先生は「サラリーマンから単独布教を志し、現在、布教所長としてつとめる体験を通しおたすけは粘り強く、最後までお世話をさせて頂く覚悟で行うもので、教祖を信じて通る姿に教祖はお働き下さる。そして神様のご守護というものは人間心を遥かに超えたもので、教祖の道具衆として心を低く、布教に歩かせて頂きたい」と話された。

引き続き、参加者を３班に分け○講話を聞いて○一日一件にをいがけ実動○心定め達成に対する努力 ── などをテーマに真剣なねりあいが行われ、何でも心定めの完遂をさせて頂こうと誓い合い閉会した。

こころの詩

▼養徳社発行『陽気』誌二月号、「道柳」より転載

▽今回の課題は「親」、笠岡に繋がる教友の方が選ばれ掲載されていましたので転載させて頂きます。おめでとうございます。

準秀詠　東悠分教会前会長夫人　田林 美智子 さん

生かされて深き理合い親の道

▼表紙の書

天場山分教会　役員　野津 正樹 さん

お＊知＊ら＊せ

西名阪道路　松原 ⇔ 天理

2/28 → 3/12（土･日除く）

6時 ～ 20時　車線規制

20時 ～ 6時　夜間通行止

大教会だより

◎立教174年春季大祭参拝

福山大教会長様
髙屋大教会長様
神邉田中一之
島根上原繁道
久松岡本久善
鶴山吉岡　壽
弥髙山大教会奥様
陽備田中一之
摩耶中村　剛
金浦大教会奥様
興明岡本久善
ひろさと大教会長様
陶山中村　剛
芳井上原繁道
呉照大教会奥様
海松ヶ岡中村　剛
東悠田中一之
吸江大教会長様
照陽岡本久善
輝美濃田中一之
新山邑大教会長様
呰部佐藤道孝
明石市岡本久善
上下吉岡　壽
府中市大教会奥様
東城吉岡　壽
服部上原繁道
島中佐藤道孝
驛家中村　剛
油木岡本久善
葦陽大教会長様
湯田原佐藤道孝
備中吉岡　壽
神昭上原繁道
美之郷大教会長様
錦備佐藤道孝
笠晴上原繁道

◎教人資格講習会（前中後期）修了者

立教174年2月10日終講

鶴眞　頼経知加

◎教会長資格検定講習会修了者

立教174年2月19日終講

多古浦　田中みゆき

訃報

高橋久光氏

亀田山分教会前会長

二月一日出直されました。

享年　七十二才

初めて子供が産まれ、思った事を少しお話したいと思います。

子供が、産まれる前までは、そこまで育児が大変だとは、思っていませんでしたが、娘が誕生し実際、その現場に立ってみると大変さを身にしみて実感しました。

例えば、夜泣きをした時、何をしても泣き止まなくて、テンテコマイでした。

産まれてから、子供の日々の変化や成長を見ながら、自分達夫婦も変わって行く姿を見ながら、色んな葛藤もありますが、今を乗り越えながら、親になって行くんだと実感し、又、親の気持ちがつくづく分かる様な気がします。

子供を持ち、親心が分かる様な分からない様な、徐々に理解して行くんだろうと思う次第です。今は、愛娘が、可愛くて、頬ずりをしたり、抱っこしたりして、毎日、時間が過ぎて行くのが早く感じられ、泣いている時は、少し時間が経つのが長く感じられる様な気がしました。

これからは更に色々な事があると思いますが、子供への徳積みになると思って、頑張ろうと思います。（う）